

“学びをひろげる わたしと〇（まる）人の会” 第27回研究会まとめ

2018年9月8日 報告・提案 安中 千夏さん（東大阪市立成和小学校）

文責 松井直哉、松森俊尚

子どもの居場所

安中千夏さんは、前回報告していただいた松尾陽子さんと同じ3年目のフレッシュな教員です。

今回の研究会では「いじめられ役」という言葉が話題になりました。一昔前なら「道化役」と言ったところでしょうか。敢えて道化をしてみせてみんなに笑われ、いじられることで集団の中に居場所を作っている子と理解しました。そしてそんな行動に、本人が自己嫌悪のようなものを感じることもあるのもよくわかります。誰しも集団の中に自分の居場所を作るために自分なりの方法を探るのでしょう。しかし自分の取れる方法は限られてしまうことも多いと思われまます。

ある朝、3年生のAくんが、友だちの水筒5本を持って登校したそうです。担任や周りの友だちにも聞こえるように、「オレ、ほめて」「すごいやろ」と言います。安中さんは、自分の生き立ちと日頃のAくんのいじめられ役になりかねない行動を重ねながら、Aくんが教室でありのままにおられる「居場所」とは何か、どうすればつくれるのか、と真剣に考えました。

参加者からこんな話がありました。――授業の中で「話し合い」を作りたいと考えている。「正しいことをしゃべるのではなく、自分の思ったことをしゃべろう」と声を掛けたり、話しやすいようにグループワークを取り入れて、自分の考えをノートに書く、グループで発表する、全体の話し合いと広げるようにもしている。しかし4人のグループでもしゃべれない。笑われるのでは、批判されるのではとの雰囲気があるからしゃべれなくなってしまふ。



そんな時に場の雰囲気を変えてくれるのは、Aくんのような人だ。いじられたり、笑われたりしながら雰囲気を変えて、意見が出しやすくなる。話し合いが広がることもある。

5本の水筒を持ったAくんではなく、持たせた友だちのことを問題にする必要があるのでは。それを聞いている周りの人たちのことも考える必要がある。――

問題は、その集団がいろんな個性を認め受け入れて包み込むことではないでしょうか。道化するしか方法が見つからないその子の問題、というより、そんな個性の子を包み込める集団かどうか、またそんな個性の子が活躍できる集団かどうか、という集団の質の問題のような気がします。集団に合わせた個性を、という発想ではなく、さまざまな個性を包み込む集団を、という問題の立て方が欲しいところだと思われました。

教師が拠って立つ軸

また「軸」という言葉も話題になりました。教師として存在している時の自分とそれ以外のことをしている時の自分、それが違うことはよくあります。何をしている時が一番楽しいのか、また自分らしいのかと考えた時、残念ながら「教師として存在している時」とは限らないのが現実のようです。

安中さんは、大学時代から現在も、障害者と共に活動する「デイ・キャンプ」を続けています。そのキャンプでは「やっち」と呼ばれているのですが、「先生としても“やっち”になりたい」と思って

います。でも「学校では、“やっち”を許してくれないだろう」と考えています。

参加者から、自分も若い頃キャンプのボランティアをしていた、キラキラと輝く子どもたちの目に会いたくて、教師を目指したけれども、できなかった。授業の中でその目に出会うのに10年かかった——と発言がありました。

教師以外の自分らしい部分を大切に、自分の楽しさや自分らしさを育み、磨きをかけるということは大切でしょう。そんな意味で教師以外の自分の「軸」をたくさん持っている方がいいと言えるのではないかと、というふうに話は進んでいきました。

でも松井は、「教育」とは「人間と人間がお互いに影響しあってお互いが成長する活動」と思っているのだから、自分にとって楽しくない活動、自分らしくない活動って「教育」と言えるの？と、思ってしまう。自分らしさや自分の楽しい事を封じ込めてする活動はもはや教育とは呼べないとすら思ってしまう。

とは言え、教師にかけられたノルマや使命をこなす時には、自分の気が乗らないからといって手を抜くわけにもいかず(本音では手を抜いてもいいと言いたいのですが)、嫌でもやらざるを得ないものです。でも自分の好きな事について語る時、言葉は熱くなり聞く者に響くものです。教育活動の中でお互いが響きあうことを求めて、教師の、そして子ども一人ひとりの自分らしさが発揮できる場面が少しでも多くなることを願うのみです。



安中さんがクラスの子どもたちの前で、安中さんらしい安中さんであることを期待しています。

番外編

研究会終了後の交流会で、松森はこんな話をしました。

現役の時、夜の職員室で「〇つけ」にいそしんでいる若い人によく言ったものです——

「私は担任を持った時には、テストの量はあなたの十分の一くらいだったと思うよ。夜遅い時間まで職員室に閉じこもって〇つけしていたり、家庭を持った女性教員の多くは(残念ながら圧倒的に多くが女性です)、テストプリントやノートを詰め込んだ大きな袋を肩にかけて、申し訳なさそうに急いで職員室を飛び出し、保育園に迎えに行き、帰宅して食事をつくり食べ終わって子どもを寝かせた後、延々と〇つけを続けています。

おそらくそんなにテストプリントをやる意味を納得しないままに続けているようで、なんだか自分で自分の首を絞めているように見えて、とても残念に思えてきます。子どもたちだって貴重な授業時間を使ってテストプリントをやっているわけだから、テストを減らせばその時間を別の授業に使うことだってできるはず。先生の思いをしこたま詰め込んだお話をしたり、子どもたちが目を輝かせて取り組む「面白い授業」をやることだってできるんじゃないかな。第一〇つけの量が減るのもいいことです。

半分減らせとは言わないけれど、せめて三分の一減らすことはできないだろうか。一人で渡るのはこわいけれど、みんなで渡れば怖くない。やってみないかい？！

でもね、結局だれもやりませんでした。みんなそれから夜遅くまで学校に残って〇つけを続けていましたし、大きな袋を抱えて飛び出していきました。(聞いたところでは、現在は個人情報失われる可能性があるため、持ち出し禁止になっている学校もあるようで、その分土・日曜日に出勤して〇つけをしているそうです。)

どうです、安中さん、松尾さん（前回報告者の松尾さんも参加してくださっていたので）やってみませんか？子どもたちがワクワクするような「“やっち”のお話」もできるんじゃないかなあ。――

二人の頭の中に校長やら先輩職員やら、保護者や子どもたちの顔が浮かび走り回ったのではないのでしょうか。「宿題」として考えてくださることになりました。無理をしないで、5年、10年かけて考え続けていただければと思っています。